

漢字と平仮名の使い分けの原則と意義

Principles and Significance of Distinguishing between Kanji and Hiragana



公益財団法人日本漢字能力検定協会 現代語研究室長

佐竹 秀雄

国立国語研究所室長、武庫川女子大学言語文化研究所長（同文学部教授）を経て現職。武庫川女子大学名誉教授、日本広報協会広報アドバイザー。編著書に『デイリーコンサイス国語辞典』『サタケさんの日本語教室』『文章を書く技術』など。

✉ Shinjin.sat@gmail.com

① はじめに

数か月前、企業向けに情報を発信しているネットメディアから質問を受けた。それは「「下さい」を漢字で書くべきかどうか」というものであった。その趣旨は「ご連絡ください」「報告してください」のような場合の「ください」を、漢字と平仮名のどちらで書くべきかということであった。このような問いが話題になるのは、一つの語を漢字で書くか平仮名で書くかについて、悩む人々が少なからず存在しているということなのだろう。

しかし、この問題を完全に解決する方法は、残念ながら存在しない。漢字と平仮名に関して、厳密な意味での使い分けのルールがないからである。もちろん、多くの場合に当てはまる、望ましい使い分けの考え方は存在する。「多くの場合に当てはまる」と限定したのは、使い分けがその場面や文脈によって変化しうるからである。

また、実際に世の中に流布している漢字と平仮名の使い分けの説明では、望ましい使い分けの考え方にもたどり着けないだろう。なぜなら、説明の多くは出発点に誤りがあるからだ。漢字と平仮名の使い分けを考えるには、まず、日本語文章の表記に対して、正しい認識をもつことからスタートしなければならない。その点について多くの人が勘違いをしている。そこで、本稿では、日本語表記における基本を踏まえて、漢字と平仮名の使い分けの問題を論じる。さらに、一部、片仮名の役割にも触れながら、日本語表記における漢字と仮名（片仮名も含めて）の使い分けの意義にも言及したい。

② ネット指南書の実態

上に述べた、漢字と平仮名の使い分けについて世の中に流布している説明というのは、インターネットの世界における指南サイトのことである。企業人や学生などが言葉の問題でつまずくと、ネットの解説に正解を求める癖があるようだ。ところが、そこにはとんでもない説明がされていることが少なくない。筆者は、2021～2023年にかけて、本誌で敬語の使い方について解説している指南サイトの現状を取り上げた。そこでは、多くのサイトで、単純なミスにとどまらず、知識不足や基本的なことに対する誤解などが多数見られた。

そこで、今回は漢字と平仮名の使い分けについて、まずネットの指南サイトをチェックしてみた。検索のキーワードに「漢字 平仮名 使い分け」を入力して得られたものから選んだ7つのサイトで、それらは本稿の最後に示している。

その結果、今回の漢字と平仮名の使い分けに関しては、致命的な間違いは認められなかった。しかし、大きな問題があった。チェックしたサイトのうち、3つ（参照サイト[E]～[G]）は、「～トキ」「マツタク」「クダサイ」など、実際の場面で漢字か平仮名かを迷いそうな語を個別に取り上げて、どうすればよいかを説明している。そして、残り（参照サイト[A]～[D]）は使い分けの原則に言及している。

本稿で取り上げたいのは、その[A]～[D]で言及されている原則の妥当性である。漢字と平仮名の使い分けで重要なのは、その根本にある考え方である。個別に語

を取り上げていた指南サイト [E] ～ [G] のように、それぞれの語をどう表記するとよいかを説明しても、それは世の中での使い分けの実情の説明にしかならない。それでは、表記辞書を引いて書き写すようなもので、使い分け全般に関する根本的な知識や能力は高まらない。漢字と平仮名について、自信をもって使い分けを行うには、基本となる考えを会得し、それを応用できるようになることが必要なのである。

こうした考え方から、漢字と平仮名の使い分けの原則に言及している指南サイト [A] ～ [D] を取り上げる。これらのサイトでは、いずれも『常用漢字表』から話が始まっている。つまり、原則として

- ①『常用漢字表』に示されている漢字、音、訓の場合は漢字で書く
 - ②『常用漢字表』に含まれていない漢字、音、訓の場合は平仮名で書く
- という内容が、最初に述べられている。また、この原則を補うものとして、品詞などの語の属性によって、平仮名を使う語についてのルールを提示している。具体的には、次のようなものである。
- ③形式名詞は平仮名で書く
 - ④補助動詞は平仮名で書く
 - ⑤接続詞は平仮名で書く
 - ⑥副詞は平仮名で書く
 - ⑦副助詞は平仮名で書く
 - ⑧当て字は平仮名で書く
 - ⑨頻繁に使う動詞の多くは平仮名で書く

さらに、こうしたルールと称したものに加えて、

- * 使い分けに絶対的なルールはなく、どちらを使っても間違いではない。
- * 使い分けは、読みやすくわかりやすく書くことの工夫の一つである。

と述べている。これらの注意点は非常に重要なことであり、この2点については高く評価できる。

以上に関して、全体を評価するならば、漢字と平仮名の使い分けに関するネットの指南サイトは、使い分けの本質を外した解説になっていると言わざるを得ない。そこで、まずは一般に見落とされがちで、漢字と平仮名の使い分けに関して必要かつ根本的なことがらを指摘するところから始めよう。

③ 分かち書きをしない日本語表記

そもそも漢字と平仮名が使い分けられることには、日本語表記が採用している漢字仮名交じりというスタイルが大きく関係している。英語では、単語と単語の間にスペースを入れて文が書かれる。これを分かち書きと呼ぶが、日本語の漢字仮名交じり文では分かち書きがされない。日本語で分かち書きがされるのは、幼児向けの本、あるいは小学校1年生向けの教科書など、ほとんど平仮名で書かれている文章の場合である。

漢字仮名交じりと分かち書きの関係を、次の文で考えてみよう。

- (1) 日本語の表記は意味を表す漢字と音を表す仮名を組み合わせで行われる。

この文を、文節という単位で分かち書きにすると、次の(2)のようになる。文節とは、文の意味が分かる範囲で細かく区切った最小単位と考えられるものである。

- (2) 日本語の 表記は 意味を 表す 漢字と 音を表す 仮名を 組み合わせで 行われる。

日本語では、普通は(2)のような分かち書きはされず、テキスト(1)のように書かれる。

ところで、漢字と平仮名には、それぞれに共通する視覚的なイメージが認められる。大まかに言えば、漢字は黒っぽくて四角く、平仮名は白っぽくて丸い。上の(1)をそのイメージに置き換えてみよう。

- (3) ■■■○■■○■■○■■○■■○■■○■■○■■○
■■○■■○■■○■■○■■○■■○■■○■■○■■○

同じことを文節に区切った(2)に適用する(見やすいように、分かち書きの切れ目を斜線で表す) と、

- (4) ■■■○/■■○/■■○/■○/■■○/■○
/■○/■■○/■○■■○■■○/■■○■■○

となる。これを見ると、一つの例外を除いて、文節の始まりには■があって、それが○に変わって文節が終わっている。ということは、文節とは、大ざっぱには漢字で始まり平仮名で終わるブロックだとも言える。このことを逆から言えば、平仮名から漢字への変わり目が、文節の切れ目だということになる。

そこで、文を読むときに、■の漢字で始まり、○の平仮名で終わるまとまりを、一つのブロックと認識すれば、次のように、文をほぼ文節単位に分割してとらえることができる。

(5) (日本語の)(表記は)(意味を)(表す)(漢字と)(音を) (表す)(仮名を)《組み》《合わせて》(行われる)。

(《 》は文節と一致していない箇所)

私たちは文を読むときに、漢字と平仮名との組み合わせがあることによって、意味のまとまり(文節)を認識しやすくなっている。つまり、漢字仮名交じりが分かち書きに代わる役割を果たしているのである。

日本語表記では、漢字と平仮名をうまく使いこなすことによって、分かち書きをしなくても、分かち書きと同等の効果を生み出しているのである。したがって、漢字と平仮名を使い分ける際には、読み手が意味のかたまりを認識しやすくなるように、書き手が配慮するとよいということになる。

④ 文節の構造と漢字・平仮名

では、文節とはどういうものか、改めて確認しておこう。文節とは、先述の通り、意味を表す最小単位であるが、その形式としては

1 個の自立語 + 0 個以上の付属語

と定義される。自立語とは、それ自体が意味や概念を表すことができる語で、学校文法では助詞・助動詞以外である。それに対して、付属語はそれ自体、単独では意味を表さず、自立語の意味を補足したり、自立語同士の関係を表したりする語で、助詞・助動詞である。

したがって、文節は、単独で意味を表せる自立語で始まり、付属語である助詞や助動詞で終わる。なお、自立語は1個だけだが、助詞・助動詞は2個以上の場合もあれば、0個、つまり、ない場合もある。

文節が、多くの場合、漢字で始まり平仮名で終わることには、当然、自立語が漢字で書かれ、付属語が平仮名で書かれることと関係している。自立語という意味のある部分に漢字が使われ、付属語という単独では意味を有しない部分に平仮名が使われる組み合わせによって、文節が漢字で始まり、平仮名で終わるパターンが生まれるのである。

この文節における、語の意味の有無に対応する漢字と平仮名の使い分けは、さらに、意味の強い語はより漢字と結びつきやすく、意味の弱い語は平仮名と結びつくという傾向を生む。文の中で、強い意味をもつ語には、その意味を明確に伝えられるように目立つ■の漢字を使

い、意味の弱い語には、自立語であっても、意味の弱さを伝えるために、目立ちにくい○の平仮名を用いる傾向が生じたのである。

この傾向によって、読み手は、漢字と平仮名の違いを手がかりに、文における語の意味の重みを認識できるようになる。したがって、文章を読むときに、漢字で表記された語だけを目で追うことで、文章全体の意味内容を把握できる効果も生み出される。つまり、漢字と平仮名の使い分けは、文章全体の読解の効率にもかかわっているのである。

⑤ 『常用漢字表』の役割

以上が、漢字と平仮名の使い分けを支える根幹の考えである。

したがって、漢字と平仮名の使い分けの原則に言及している指南サイトで、

①『常用漢字表』に示されている漢字、音、訓の場合は漢字で書く

②『常用漢字表』に含まれていない漢字、音、訓の場合は平仮名で書く

と、『常用漢字表』から原則をスタートさせていることは、本質から外れている。

『常用漢字表』は、漢字と平仮名の使い分けのためのものではないからだ。もし、これらが出発点となる大原則ならば、例えば、「子供」「平仮名」などは常に漢字で書き、「人たち」の「たち」は平仮名で書かなければならないはずである。しかし、現実には「子ども」「人達」と書かれることも少なくない。そして、何よりも、ここで取り上げた指南サイトはいずれも、「平仮名」と書かずに「ひらがな」と表記している。①②のように述べていることと完全に矛盾している。

実際に、漢字を使うか平仮名を使うかを決めるものは何だろうか。表記するにあたって、自立語部分は、先述のように、読みやすさの観点から漢字で表記するとよいことになる。しかし、その漢字を読み手が知らない、読めないのであれば、漢字を使うと、伝達上の支障が起こってしまう。漢字を使用するかどうかの重要な決め手は、読み手がその漢字を知っているか、読めるかということにある。

そこで、該当する漢字を使ってよいか(正確には、相手が読めるかどうか)を判定するための物差しが『常用

漢字表』なのである。『常用漢字表』に示された漢字、音、訓は、原則として義務教育の間に学ぶことになっている。つまり、義務教育を終えた日本人が理解できる漢字とされるものが、『常用漢字表』に示された漢字、音、訓ということになっている。

使いたい漢字が『常用漢字表』にあれば、ほとんどの人は読めるはずなので、漢字を使っても読んでもらえると判断する。反対に、その漢字が『常用漢字表』にない表外字や表外音訓であれば、読んでももらえない可能性が高いので、平仮名にしたり振り仮名を付けたりすることになる。このように、漢字と平仮名の使い分けには、その文章を読み手が読みやすくなるようにすることが第一条件である。『常用漢字表』にその漢字、音、訓が示されているかどうかは、二の次なのである。

⑥ 平仮名表記をする意味

次に、使い分けの原則を述べていたネット指南サイトにあった、平仮名を使う語のルールを検証しておこう。指南サイトであった形式を再掲する。

- ③形式名詞は平仮名で書く
- ④補助動詞は平仮名で書く
- ⑤接続詞は平仮名で書く
- ⑥副詞は平仮名で書く
- ⑦副助詞は平仮名で書く
- ⑧当て字は平仮名で書く
- ⑨頻繁に使う動詞の多くは平仮名で書く

上の③の形式名詞とは「もの・こと・ところ」などである。例えば、

*** 人の話はきちんと聞くものだ。**

*** 会議は来週に延期されることになった。**

のように、その語の直前部分までを名詞化する働きをしており、これらそのものに強い意味があるわけではない。よって、③は指摘通りで問題はない。

④の補助動詞は

*** 提出期限は6月30日である。**

*** 反対されて黙っている者はいなかった。**

のように使われ、いずれも実質的な意味が弱い。だから、平仮名で書くこと自体に問題はない。しかし、それなら、

*** おいしくない料理はいらない。**

*** 途中であきらめないでほしい。**

の「ない」「ほしい」などの補助形容詞も同類として挙げてほしい。

⑤⑥の接続詞と副詞の場合は、漢字で書ける語もあり、必ずしも平仮名で書かねばならないというわけではない。しかし、

*** 兄、姉、そして私の三人が出かけた。**

*** 勉強してやっと合格した。**

の例からもわかるように、それを取り除いたとして文としては成り立つし、根本的な意味に大きな違いはない。接続詞と副詞は、文脈上、意味を補足したり強めたり、また、明確にしたりするという補助的な役割を果たす語であり、文の中核になる名詞や動詞ほどの強い意味を示していないと言える。

ちなみに、接続詞や副詞とほぼ同様のものとして感動詞がある。これも仲間に加えたい。

⑦で副助詞が特別のように取り上げられているが、なぜ副助詞が特別扱いされるのか。それよりは、助詞・助動詞は特別な理由がない限り平仮名で書かれるので、助詞・助動詞として立てるべきであろう。

⑧の当て字も原則として平仮名書きするのがよいのでこのままで悪くはない。しかし、当て字には『常用漢字表』の付表に含まれている「田舎」「波止場」「凸凹」などもある。平仮名で書く項目に立てるなら、もう少し説明が必要であろう。

⑨の「頻繁に使う動詞の多くは平仮名で書く」は、「ある・いる・する」などを想定しているのだろうが、表現の仕方が乱暴で、一般の人にはわからないのではないかと。また、これに類するものとして、形容詞の「ない・よい」なども存在する。動詞に限定する必要はない。

ここで大事なのは「動詞」よりも「頻繁に使う」ということである。動詞だけでなく、使用頻度の高い形容詞も仮名書きされやすい。これには理由がある。一つには漢字より仮名の方が書く手間が少ないことが関係している。従来、日本語表記は長く手書きで行われてきた。手書きの場合、漢字よりも平仮名の方が一般に書く手間が少ない。というわけで、よく使う語は漢字で書くより平仮名にする方がラクである。つまり、経済効率の問題なのである。

また、「ある・する・いる・ない・よい」など、よく使われる語は、その語が指し示す意味が複雑ではない。それぞれの語がもつ意味内容が、いわば重くない。これ

も仮名書きになる理由であろう。

以上のことを踏まえて、平仮名で書かれる語のルールとして整理するなら、次のようになるのではないか。

(1) 助詞・助動詞

(2) 用言の活用語尾

(3) 形式名詞・補助用言

(4) 接続詞・感動詞・副詞

(5) 表音的表記の部分

(6) 表外漢字や表外音訓を使って書き表される部分

一言付け加えておくと、(5)の表音的表記の部分というのは、

*「だ、だ、駄目だ。」

*その俳優は笑いながら上手に消える。

のように、音声を表す部分や、漢字の読みを示すルビなどである。漢字と平仮名の使い分けの基本は、表意文字である漢字、表音文字である平仮名の特性が生かされるようになっているのである。

7 表記のゆれと表記の表現性

以上に述べてきたように、語に関する漢字と平仮名の使い分けの絶対的なルールはない。だから、同一の語が、場合によって漢字で書かれたり平仮名で書かれたりすることが生じる。

例えば、ある人がふだんは「様子」と書いているのに、読み手が子供の場合に、それを意識して「ようす」と書くことがある。また、読み手に合わせるだけでなく、表記する人の違いによっても、異なる表記形式が生じる。表記する人の好みで「私」「わたし」の両表記形式が出現することがある。さらに、時代によるものもある。例えば、「挨拶」「曖昧」に使われる漢字は、いずれも2010年まで『常用漢字表』に含まれていなかった。そのため、それ以前は「あいまい」「あいさつ」と平仮名で書かれることが多かった。しかし、現在では「挨拶」「曖昧」という漢字表記が見られるようになった。その結果、「アイサツ」「アイマイ」それぞれには、漢字と平仮名の両方の表記形式が認められる。

このように同一語に複数の表記形式が認められる現象は、「表記のゆれ」と呼ばれる。表記のゆれは、漢字と平仮名との間に限らず、

(1) 漢字と平仮名 例：昨日ーきのう

(2) 漢字と片仮名 例：倶楽部ークラブ

(3) 平仮名と片仮名 例：ごみーゴミ

(4) 送り仮名 例：行うー行なう

(5) 仮名遣い 例：いなすまーいなづま

などを始めとして、さまざまなものがある。これらについて、多くの指南書を始め、望ましくないものと否定している。

確かに、同一語が異なる表記形式で書かれるのは見栄えのよいものではない。しかし、私たちが表記をするのは、形式を整えることが目的ではなく、何かを伝えるための手段として行っているのである。その伝達という目的を第一とする考えに立てば、表記のゆれに目くじらを立てる理由はなくなる。

例えば、全く異なる文章の中で、表記のゆれが出現しても、読み手が特に困ることではない。しかし、同一の文章内で、例えば「本日」の意味での「今日」と「きょう」という表記形式があれば、読む人は「今日」は「こんにち」と読むべきだと思う可能性が生じる。また、同一文章に「ごみ」と「ゴミ」が出てくれば、両者に意味の上で何らかの違い、例えば、ゴミの種類の違いがあるのではないかと、不必要な想像をさせたりすることも生じる。このようなことは、伝達の観点からは望ましいことではない。よって、同一文章内では、同一語の表記は統一されていることが望ましいということになる。

他方、表記のゆれは、表記における表現性に結びつくことがある。例を挙げよう。

*「手は絶対放さないでください」

「はい、ぜったい放しません」

*自分勝手な人間はサイテーだと思う。

前者の「絶対」と「ぜったい」は同一語である。ただし、後者の「ぜったい」は平仮名で書くことによって、「絶対」を強調した効果を生んでいる。つまり、表記の違いが表現力にかかわっている。後者の例では、普通なら「最低」と書くべきところを「サイテー」という一般的ではない表記をしている。これについては、「最低」という漢字表記では表しきれない意味をこめて示していると考えられる。こちらは、一般的、標準的でない表記に、表記主体の思いがこめられ、それが表現力になっていると考えることができる。

表記のゆれは、このように表現力を発揮する効果ももっている。ただし、その表現力は、一般に表記が固定

されている状態、例えば、「最低」は漢字で書くものだというような共通認識があつてこそ、その標準的な表記形式と異なる表記形式を選択することによって、発揮できると言える。

つまり、大きな意味では、標準的表記がある程度固定されていることは十分に意味があると言える。よって、漢字と平仮名の使い分けを明確にしようという考え方は間違っているとは言えない。しかし、だからと言って、「この語はこのように書くべきだ」と表記形式を固定するのは行き過ぎであろう。

⑧ おわりに

私たちが表記をするのは伝達のためである。伝達の最終目標は読み手に伝わることである。したがって、漢字と平仮名の使い分けにおいても、読み手に対して、語をいかに識別しやすくさせるか、また、文章中の重要な語をより強く認識させるかを意識することが必要なのである。しかし、読み手の存在が使い分けの要件だとすれば、読み手が異なる場面ごとに、使い分けは変化する可能性が生じる。

それゆえ、最初に述べたように、厳密な意味での使い分けのルールはありえないということになる。ただし、それでも多くの場合に当てはまる、最大公約数ふうの望ましい使い分けは存在する。それが、一般的な読み手を意識して、漢字仮名交じりの効果を活かし、重要な語の意味を漢字によって強めるという考え方に沿ったものということなのである。

読み手に伝わるのが保証されれば、漢字と仮名の使い分けは絶対的なものではなくなる。また、そこに、表記による表現性が発揮されても一向に問題はないはずである。

他方、日本語の自動処理の効率化の観点から、漢字と平仮名の使い分けを厳格化して、表記形式の統一を推進しようという立場も考えられる。しかし、それは日本語使用者の表現力を抑え込むおそれがある。機械的で人間の表現力を許さない社会は、決してコミュニケーションの豊かな社会ではあるまい。合理的な使い分けによる表現力を認めた上で、日本語処理の方法に工夫がなされるべきであろう。

参照ウェブサイト

[A] 神楽坂編集室

漢字？ひらがな？使い分けに迷ったときの7つのポイント

<https://kagurazaka-editors.jp/common-kanji-and-kana/>

[B] Edit Partners

漢字とひらがな、どっち！？使い分けに迷ったときの6つの判断基準

<https://www.edit-partners.jp/column/kanji-or-hiragana>

[C] Wordrabbitt

最適なバランスやルール 漢字とひらがなの使い分け

<https://wordrabbitt.jp/blog/80>

[D] 山之内総合研究所

漢字書きとひらがな書きの使い分け

<http://www.yamanouchi-yri.com/yrihp/techwrt-2-4s/t-2-4s03f.htm>

[E] 阿竹印刷コラム

漢字とひらがなの使い分けについて

https://column.atake-lp.com/print_column32/

[F] ライフマスター株式会社

漢字？ひらがな？どちらが正しい？

<https://www.lifemeister.com/information/6847/>

[G] ビジ助 channel

ビジネスメールは漢字かひらがなか？読みやすくするためのマナー

https://bizisuke.jp/hint/20220920_5993/

参考文献

- [1] 佐竹秀雄, 日本語の表記の表現性, 国文学 解釈と鑑賞 45 - 8, 1980
- [2] 国立国語研究所, 『現代表記のゆれ』, 国立国語研究所報告 75, 1983
- [3] 佐竹秀雄, 表記行動と規則、仮名の役割, 『日本語百科大事典』, 大修館書店, 1988
- [4] 佐竹秀雄, 表記行動と漢字, 日本語学 11 - 11, 1990
- [5] 佐竹秀雄・佐竹久仁子, ことばの表記の教科書, ベレ出版, 2005